第１０章

ドゥルヴァ・マハーラージャと

ヤクシャ族の戦い

第１節

मैत्रेय उवाच
प्रजापतेर्दुहितरं शिशुमारस्य वै ध्रुवः ।
उपयेमे भ्रमिं नाम तत्सुतौ कल्पवत्सरौ ॥ १ ॥

マイトゥレーヤ　ウヴァーチャ
maitreya uvāca

プラジャーパテール　ドゥヒタランム
prajāpater duhitaraṁ

シシュマーラッシャ　ヴァイ　ドゥルヴァハ
śiśumārasya vai dhruvaḥ

ウパイェーメー　ブフラミンム　ナーマ
upayeme bhramiṁ nāma

タトゥ・スタウ　カルパ・ヴァトゥサラウ
tat-sutau kalpa-vatsarau

maitreyaḥ uvāca—偉大な聖者マイトゥレーヤが続けた; *prajāpateḥ*—プラジャーパティの; *duhitaram*—娘; *śiśumārasya*—シシュマーラの; *vai*—確かに; *dhruvaḥ*—ドゥルヴァ・マハーラージャ; *upayeme*—結婚した; *bhramim*—ブラミ; *nāma*—〜という名前の; *tat-sutau*—彼女の息子たち; *kalpa*—カルパ; *vatsarau*—ヴァトゥサラ。

偉大な聖者マイトゥレーヤが言った。「ヴィドゥラよ。そのあと、ドゥルヴァ・マハーラージャはプラジャーパティ・シシュマーラの娘ブラミと結婚し、カルパとヴァトゥサラという子をもうけた」

要旨解説

この節から、ドゥルヴァ・マハーラージャは、父親の王座を受けつぎ、父が自己を悟るために森に入っていったあとに結婚したことがわかります。このことで言及すべき重要な点は、マハーラージャ・ウッターナパーダは我が子に強い愛着を感じていたのに、また父親は息子や娘ができるだけ早く結婚できるよう手配するのが義務であるはずなのに、なぜ、宮殿

を去るまえに我が子を結婚させなかったのか、という疑問です。それは、マハーラージャ・ウッターナパーダがラージャルシ、すなわち聖なる王だったから、という理由によります。国務や行政管理で忙しくても、自己の悟りを強く願っていたのです。そのため、ドゥルヴァ・マハーラージャが国政を担当するにふさわしい人物になったときを出家する機会と考え、5歳にすぎない我が子が、恐れることなく自己の悟りを求めて家を出たように、宮殿を後にしたのでした。精神的悟りこそが他のどれほど重要な仕事よりも優先されるべきことをしめす希な例と言えます。マハーラージャ・ウッターナパーダは、ドゥルヴァ・マハーラージャの結婚はそれほど重要ではなく、自分が自己の悟りのために森に行くことを優先すべきであることを、よく知っていたのです。

第２節

इलायामपि भार्यायां वायोः पुत्र्यां महाबलः ।
पुत्रमुत्कलनामानं योषिद्रत्नमजीजनत् ॥ २ ॥

イラーヤーンム　アピ　バハーリャーヤンム
ilāyām api bhāryāyāṁ

ヴァーヨーホ　プトゥリャーンム　マハー・バラハ
vāyoḥ putryāṁ mahā-balaḥ

プトゥランム　ウトゥカラ・ナーマーナンム
putram utkala-nāmānaṁ

ヨーシドゥ・ラトゥナンム　アジージャナトゥ
yoṣid-ratnam ajījanat

ilāyām—イラーという名の妻に; *api*—もまた; *bhāryāyām*—妻に; *vāyoḥ*—半神ヴァーユ（空気の支配者）の; *putryām*—娘に; *mahā-balaḥ*—非常に力強いドゥルヴァ・マハーラージャ; *putram*—息子; *utkala*—ウトゥカラ; *nāmānam*—その名の; *yoṣit*—女性; *ratnam*—宝石; *ajījanat*—彼はもうけた。

きわめて力強いドゥルヴァ・マハーラージャには、半神ヴァーユの娘であるイラー（Ilā）という別の妻がいた。ドゥルヴァ・マハーラージャはイラーとのあいだに、ウトゥカラという子息と美貌の娘をもうけた。

第３節

उत्तमस्त्वकृतोद्वाहो मृगयायां बलीयसा ।
हतः पुण्यजनेनाद्रौ तन्मातास्य गतिं गता ॥ ३ ॥

ウッタマス　トゥヴ　アクリトードゥヴァーホー
uttamas tv akṛtodvāho

ムリガヤーヤーンム　バリーヤサー
mṛgayāyāṁ balīyasā

ハタハ　プニャ・ジャネーナードゥラウ
hataḥ puṇya-janenādrau

タン・マーターッシャ　ガティンム　ガター
tan-mātāsya gatiṁ gatā

uttamaḥ—ウッタマ; *tu*—しかし; *akṛta*—〜がない; *udvāhaḥ*—結婚; *mṛgayāyām*—狩りの途中で; *balīyasā*—非常に強い; *hataḥ*—殺された; *puṇya-janena*—あるヤクシャに; *adrau*—ヒマラヤ山脈で; *tat*—彼の; *mātā*—母親（スルチ）; *asya*—彼女の息子; *gatim*—道; *gatā*—従った。

ドゥルヴァ・マハーラージャの弟で、未婚のウッタマは、ヒマラヤ山脈で狩りをしているとき、ひとりの強靭なヤクシャに殺害された。母スルチも、我が子がたどった道を選び、死亡した。

第 4 節

ध्रुवो भ्रातृवधं श्रुत्वा कोपामर्षशुचार्पितः ।
जैत्रं स्यन्दनमास्थाय गतः पुण्यजनालयम् ॥ ४ ॥

ドゥルヴォー　ブァラートゥリ・ヴァダハンム　シュルトゥヴァー
dhruvo bhrātṛ-vadhaṁ śrutvā

コーパーマルシャ・シュチャールピタハ
kopāmarṣa-śucārpitaḥ

ジャイトゥランム　シャンダナンム　アースタハーヤ
jaitraṁ syandanam āsthāya

ガタハ　プニャ・ジャナーラヤンム
gataḥ puṇya-janālayam

dhruvaḥ—ドゥルヴァ・マハーラージャ; *bhrātṛ-vadham*—弟の殺害; *śrutvā*—この知らせを聞くこと; *kopa*—怒り; *amarṣa*—報復; *śucā*—嘆き; *arpitaḥ*—〜で満たされて; *jaitram*—勝利の; *syandanam*—戦闘馬車; *āsthāya*—乗っている; *gataḥ*—行った; *puṇya-jana-ālayam*—ヤクシャの都へ。

ドゥルヴァ・マハーラージャは、弟のウッタマがヒマラヤ山脈でヤクシャ族に殺され

たことを聞き、嘆きと怒りに圧倒され、すぐさま戦闘馬車に乗ってヤクシャの都アラカープリーに向かった。

要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャが悲しみに打たれ、怒り、そして敵に憎しみをいだいたのは、偉大な献愛者としての立場に反することではありません。献愛者は怒ってはいけない、憎んでも、悲しみに意気消沈してもいけない、とする考えはまちがっています。ドゥルヴァ・マハーラージャは王であり、弟がヒマラヤ一帯に住むヤクシャに理不尽な殺されかたをしたとき、かれらに報復するのは当然の義務だったのです。

第５節

गत्वोदीचीं दिशं राजा रुद्रानुचरसेविताम् ।
ददर्श हिमवद्द्रोण्यां पुरीं गुह्यकसङ्कुलाम् ॥ ५ ॥

ガトゥヴォーディーチーンム　ディシャンム　ラージャー
gatvodīcīṁ diśaṁ rājā

ルドゥラーヌチャラ・セーヴィターンム
rudrānucara-sevitām

ダダルシャ　ヒマヴァドゥ・ドゥローニャーンム
dadarśa himavad-droṇyāṁ

プリーンム　グヒャカ・サンクラーンム
purīṁ guhyaka-saṅkulām

gatvā—行くこと; *udīcīm*—北部; *diśam*—方向; *rājā*—ドゥルヴァ王; *rudra-anucara*—ルドゥラ、すなわち主シヴァの従者たちによって; *sevitām*—住んでいる; *dadarśa*—見た; *himavat*—ヒマラヤの; *droṇyām*—ある谷に; *purīm*—都市; *guhyaka*—幽霊のような人々; *saṅkulām*—～で満たされた。

ドゥルヴァ・マハーラージャは、ヒマラヤ山脈一帯の北部を目指して進んだ。ある谷に到着したとき、主シヴァの従者である幽霊のような人々であふれた都市を見つけた。

要旨解説

この節では、ヤクシャ族はほとんどが主シヴァの従者である、と述べられています。このヤクシャに関する説明から、ヒマラヤ民族のチベット人と考えられます。

第６節

दध्मौ शङ्खं बृहद्बाहुः खं दिशश्चानुनादयन् ।
येनोद्विग्नदृशः क्षत्तरुपदेव्योऽत्रसन्भृशम् ॥ ६ ॥

ダドゥマウ　シャンカハンム　ブリハドゥ・バーフフ
dadhmau śaṅkhaṁ bṛhad-bāhuḥ

カハンム　ディシャシュ　チャーヌナーダヤン
khaṁ diśaś cānunādayan

イェーノードゥヴィグナ・ドゥリシャハ　クシャッタル
yenodvigna-dṛśaḥ kṣattar

ウパデーヴョー　トゥラサン　ブフリシャンム
upadevyo 'trasan bhṛśam

dadhmau—吹き鳴らした; *śaṅkham*—ホラ貝; *bṛhat-bāhuḥ*—完全武装した者; *kham*—空; *diśaḥ ca*—そしてあらゆる方角に; *anunādayan*—鳴り響かせている; *yena*—それによって; *udvigna-dṛśaḥ*—非常に不安に見えて; *kṣattaḥ*—ヴィドゥラよ; *upadevyaḥ*—ヤクシャ族の妻たち; *atrasan*—おののいた; *bhṛśam*—非常に。

マイトゥレーヤが続けた。「ヴィドゥラよ。アラカープリーに到着したドゥルヴァ・マハーラージャは、すぐにホラ貝を吹き鳴らした。その音は天空に、そして四方八方に轟いた。ヤクシャ族の妻たちは恐れおののき、その目には不安な様子がありありと浮かんでいた。

第７節

ततो निष्क्रम्य बलिन उपदेवमहाभटाः ।
असहन्तस्तन्निनादमभिपेतुरुदायुधाः ॥ ७ ॥

タトー　ニシュクラミャ　バリナ
tato niṣkramya balina

ウパデーヴァ・マハー・バハターハ
upadeva-mahā-bhaṭāḥ

アサハンタス　タン・ニナーダンム
asahantas tan-ninādam

アビヒペートゥル　ウダーユダハーハ
abhipetur udāyudhāḥ

tataḥ—そのあと; *niṣkramya*—出て来て; *balinaḥ*—非常に力強い; *upadeva*—クヴェーラ; *mahā-bhaṭāḥ*—偉大な兵士たち; *asahantaḥ*—耐えられずに; *tat*—ホラ貝の; *ninādam*—音; *abhipetuḥ*—攻撃した; *udāyudhāḥ*—さまざまな武器に身を固めて。

英雄ヴィドゥラよ。ヤクシャ族の勇壮かつ強靭な兵士たちは、ドゥルヴァ・マハーラージャの吹き鳴らす法螺貝の音に耐えきれず、武器を手に、都を出てドゥルヴァに襲いかかった。

第８節

स तानापततो वीर उग्रधन्वा महारथः ।
एकैकं युगपत्सर्वानहन् बाणैस्त्रिभिस्त्रिभिः ॥ ८ ॥

サ　ターン　アーパタトー　ヴィーラ
sa tān āpatato vīra

ウグラ・ダハンヴァー　マハー・ラタハハ
ugra-dhanvā mahā-rathaḥ

エーカイカンム　ユガパトゥ　サルヴァーン
ekaikaṁ yugapat sarvān

アハン　バーナイス　トゥリビヒス　トゥリビヒヒ
ahan bāṇais tribhis tribhiḥ

saḥ—ドゥルヴァ・マハーラージャ; *tān*—彼らすべてを; *āpatataḥ*—彼の上に落ちてくる; *vīraḥ*—英雄; *ugra-dhanvā*—力強い射手; *mahā-rathaḥ*—多くの戦闘馬車を相手に戦える者; *eka-ekam*—次々と; *yugapat*—同時に; *sarvān*—彼ら全員; *ahan*—殺害した; *bāṇaiḥ*—矢で; *tribhiḥ tribhiḥ*—３本で。

戦闘馬車を巧みに操り、偉大な射手でもあるドゥルヴァ・マハーラージャは、同時に３本の矢を放ってヤクシャたちを次々に殺していった。

第９節

ते वै ललाटलग्नैस्तैरिषुभिः सर्व एव हि ।
मत्वा निरस्तमात्मानमाशंसन् कर्म तस्य तत् ॥ ९ ॥

テー　ヴァイ　ララータ・ラグナイス　タイル
te vai lalāṭa-lagnais tair

イシュビヒヒ　サルヴァ　エーヴァ　ヒ
iṣubhiḥ sarva eva hi

マトゥヴァー　ニラスタンム　アートゥマーナンム
matvā nirastam ātmānam

アーシャンムサン　カルマ　タッシャ　タトゥ
āśaṁsan karma tasya tat

te—彼等は; *vai*—確かに; *lalāṭa-lagnaiḥ*—自分たちの頭に集中され; *taiḥ*—それらによって; *iṣubhiḥ*—矢; *sarve*—彼らすべて; *eva*—確かに; *hi*—確実に; *matvā*—考えている; *nirastam*—敗北して; *ātmānam*—彼ら自身; *āśaṁsan*—讃えた; *karma*—行動; *tasya*—彼の; *tat*—それ。

ヤクシャ族の勇者たちは、ドゥルヴァ・マハーラージャの矢によって仲間の首がつぎつぎとはねられている様を見て、絶体絶命の危機におちいっていることをさとり、敗北は必至である、と覚悟を決めた。しかし勇者でもあるかれらは、ドゥルヴァの戦いぶりを褒めたたえた。

要旨解説

このような正々堂々たる闘魂は、この節ではひじょうに重要な意味があります。ヤクシャ族は容赦なく攻撃され、その敵がドゥルヴァ・マハーラージャです。が、その勇猛果敢な戦いぶりを目のあたりにし、一同感服したのでした。敵の力量を率直に認めるこの気質こそが、真のクシャトリヤ精神と言えましょう。

第１０節

तेऽपि चामुममृष्यन्तः पादस्पर्शमिवोरगाः ।
शरैरविध्यन् युगपद् द्विगुणं प्रचिकीर्षवः ॥ १० ॥

テー　ピ　チャームンム　アムリッシャンタハ
te 'pi cāmum amṛṣyantaḥ

パーダ・スパルシャンム　イヴォーラガーハ
pāda-sparśam ivoragāḥ

シャライル　アヴィデャン　ユガパドゥ
śarair avidhyan yugapad

ドゥヴィ・グナンム　プラチキールシャヴァハ
dvi-guṇaṁ pracikīrṣavaḥ

te—ヤクシャ族; *api*—もまた; *ca*—そして; *amum*—ドゥルヴァめがけて; *amṛṣyantaḥ*—〜に我慢できず; *pāda-sparśam*—足に触れられて; *iva*—のように; *uragāḥ*—蛇; *śaraiḥ*—矢で; *avidhyan*—打たれて; *yugapat*—同時に; *dvi-guṇam*—２倍; *pracikīrṣavaḥ*—報復しようとして。

足で踏みつけられるのが耐えられない蛇のように、ドゥルヴァ・マハーラージャの驚異的な力を見て気がおさまらないヤクシャ族は、２倍の数の矢を、すなわち各戦士から６本の矢を放ち、怒濤のように反撃した。

第１１-１２節

ततः परिघनिस्त्रिंशैः प्रासशूलपरश्वधैः
शक्त्यृष्टिभिर्भुशुण्डीभिश्चित्रवाजैः शरैरपि ॥ ११ ॥
अभ्यवर्षन् प्रकुपिताः सरथं सहसारथिम्
इच्छन्तस्तत्प्रतीकर्तुमयुतानां त्रयोदश ॥ १२ ॥

タタハ　パリガハ・ニストゥリンムシャイヒ
tataḥ parigha-nistriṁśaiḥ

プラーサシューラ・パラシュヴァダハイヒ
prāsaśūla-paraśvadhaiḥ

シャクティ・リシュティビヒル　ブフシュンディービヒシュ
śakty-ṛṣṭibhir bhuśuṇḍībhiś

チトゥラ・ヴァージャイヒ　シャライル　アピ
citra-vājaiḥ śarair api

アビャヴァルシャン　プラクピターハ
abhyavarṣan prakupitāḥ

サラタハンム　サハ・サーラティンム
sarathaṁ saha-sārathim

イッチャンタス　タトゥ　プラティーカルトゥンム
icchantas tat pratīkartum

アユターナーンム　トゥラヨーダシャ
ayutānāṁ trayodaśa

tataḥ—そのとき; *parigha*—鉄の棒で; *nistriṁśaiḥ*—そして剣; *prāsa-śūla*—三つ叉矛; *paraśvadhaiḥ*—そして槍; *śakti*—矛で; *ṛṣṭibhiḥ*—投げ槍; *bhuśuṇḍībhiḥ*—ブシュンディー武器で; *citra-vājaiḥ*—さまざまな羽をつけた; *śaraiḥ*—矢で; *api*—もまた; *abhyavarṣan*—ドゥルヴァに浴びせた; *prakupitāḥ*—怒って; *sa-ratham*—彼の戦闘馬車と共に; *saha-sārathim*—彼の馬車の操縦者と共に; *icchantaḥ*—望んでいる; *tat*—ドゥルヴァの行動; *pratīkartum*—反撃するために; *ayutānām*—何万もの; *trayodaśa*—13。

ヤクシャ族の兵力は13万人、どの顔も憤怒の形相凄まじく、ドゥルヴァ・マハーラージャの卓越した戦力に対抗した。あらん限りの力で、ドゥルヴァ・マハーラージャ、その戦闘馬車、そして御者めがけて、羽のついた多様な型の矢、パリガ（鉄の棍棒）、ニストゥリンシャ（剣）、プラーサシューラ（三つ叉矛）、パラシュヴァダ（槍）、シャクティ（矛）、リシュティ（投げ槍）、ブシュンディーの武器を雨霰と浴びせかけた。

第１３節

औत्तानपादिः स तदा शस्त्रवर्षेण भूरिणा ।
न एवादृश्यताच्छन्न आसारेण यथा गिरिः ॥ १३ ॥

アウッターナパーディヒ　サ　タダー
auttānapādiḥ sa tadā

シャストゥラ・ヴァルシェーナ　ブゥーリナー
śastra-varṣeṇa bhūriṇā

ナ　エーヴァードゥリッシャターッチャンナ
na evādṛśyatācchanna

アーサーレーナ　ヤタハー　ギリヒ
āsāreṇa yathā giriḥ

auttānapādiḥ—ドゥルヴァ・マハーラージャ; *saḥ*—彼; *tadā*—その時; *śastra-varṣeṇa*—武器の嵐によって; *bhūriṇā*—絶え間ない; *na*—ではない; *eva*—確かに; *adṛśyata*—見ることができた; *ācchannaḥ*—覆われて; *āsāreṇa*—絶え間ない雨によって; *yathā*—〜のように; *giriḥ*—山。

ドゥルヴァ・マハーラージャは、襲いかかる無数の武器によって全身を覆われた。山が集中豪雨に覆われるように。

要旨解説

シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラはこの節について、ドゥルヴァ・マハーラージャが敵の豪雨のような矢の攻撃で覆われた、といっても、敗北したわけではない、と指摘しています。山の頂上が大雨に包まれるという例は、この状況を適格に描写しています。なぜなら、山が集中豪雨に見舞われると、山の斜面に積もっていた汚れたものがすべて洗いながされるからです。同じように、敵が放った矢の総攻撃は、かえってドゥルヴァ・マハーラージャにヤクシャ族を撃破する新たな勢いをつけた、とうことであり、それまであったかもしれないドゥルヴァの弱点は洗いながされた、ということなのです。

第１４節

हाहाकारस्तदैवासीत्सिद्धानां दिवि पश्यताम् ।
हतोऽयं मानवः सूर्यो मग्नः पुण्यजनार्णवे ॥ १४ ॥

ハーハー・カーラス　タダイヴァーシートゥ
hāhā-kāras tadaivāsīt

シッダハーナーンム　ディヴィ　パッシャターンム
siddhānāṁ divi paśyatām

ハトー　ヤンム　マーナヴァハ　スーリョー
hato 'yaṁ mānavaḥ sūryo

マグナハ　プニャ・ジャナールナヴェー
magnaḥ puṇya-janārṇave

hāhā-kāraḥ—失望の叫び; *tadā*—その時; *eva*—確かに; *āsīt*—表わされた; *siddhānām*—シッダローカの住人すべての; *divi*—空に; *paśyatām*—戦いを見つめていた者たち; *hataḥ*—殺した; *ayam*—この; *mānavaḥ*—マヌの孫; *sūryaḥ*—太陽; *magnaḥ*—沈む; *puṇya-jana*—ヤクシャ族の; *arṇave*—海に。

高位の惑星に住むすべてのシッダたちは、空からその戦いを見つめていたが、ドゥルヴァ・マハーラージャが集中攻撃の矢に全身を覆われたとき、叫びをあげた。「マヌの孫、ドゥルヴァが敗れた！」。ドゥルヴァ・マハーラージャが太陽のように昇り、そして今、ヤクシャ族という海のなかに沈んでいった、と叫んだのである。

要旨解説

この節にある*mānava*（マーナヴァ）ということばはひじょうに重要です。ふつう「人間」という意味で使われており、ここでドゥルヴァ・マハーラージャはマーナヴァと呼ばれています。ドゥルヴァ・マハーラージャだけではなく、すべての人間がマヌの子孫です。ヴェーダ文化ではマヌが立法者とされ、今でもインドのヒンドゥー教徒はマヌが定めた法律に従っています。ですから、人間社会にいる人はだれでもマーナヴァ、つまりマヌの子孫なのですが、ドゥルヴァ・マハーラージャは、偉大な献愛者であることから、誉れたかきマーナヴァとされています。

飛行機を使わずに空を飛ぶことのできるシッダローカ惑星の住人は、ドゥルヴァ・マハーラージャの勝利を願っていました。このことについてシュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーは、献愛者は至高主に十分に守られているけれども、半神たち、また一般の人々でさえも献愛者の安全無事を祈っている、と述べています。ドゥルヴァ・マハーラージャがヤクシャ

族という海のなかに沈んだ、という比較にも重要な意味がこめられています。太陽が地平線に沈むと、太陽そのものが海に沈んでしまったかのように見えますが、もちろん太陽が水中に没したわけではありません。同じように、ドゥルヴァはヤクシャ族の海に沈んだかのように見えても、進退きわまった状態に追いこまれたわけではありません。結局、ドゥルヴァ・マハーラージャは戦っているのですから、交戦中に危機的状況におちいることがあります。しかし、窮地におちいったように見えても、太陽が夜明けとともにふたたび姿を現わすように、敗北を喫したわけではなかったのです。

第１５節

नदत्सु यातुधानेषु जयकाशिष्वथो मृधे ।
उदतिष्ठद्रथस्तस्य नीहारादिव भास्करः ॥ १५ ॥

ナダトゥス　ヤートゥダハーネーシュ
nadatsu yātudhāneṣu

ジャヤ・カーシシュヴ　アトゥホー　ムリデヘー
jaya-kāśiṣv atho mṛdhe

ウダティシュタハドゥ　ラタハス　タッシャ
udatiṣṭhad rathas tasya

ニーハーラードゥ　イヴァ　バハースカラハ
nīhārād iva bhāskaraḥ

nadatsu—叫んでいるとき; *yātudhāneṣu*—幽霊の体を持つヤクシャ族; *jaya-kāśiṣu*—勝利を宣言している; *atho*—そのとき; *mṛdhe*—戦いで; *udatiṣṭhat*—現われた; *rathaḥ*—戦闘馬車; *tasya*—ドゥルヴァ・マハーラージャの; *nīhārāt*—霧の中から; *iva*—のように; *bhāskaraḥ*—太陽。

ヤクシャ族は戦いに勝ったものと思いこみ、ドゥルヴァ・マハーラージャを撃破したと宣言した。しかしそのとき、あたかも、たちこめる霧のなかから忽然と太陽が出てくるように、ドゥルヴァの戦闘馬車が姿を現わした。

要旨解説

ここでは、ドゥルヴァ・マハーラージャが太陽に、ヤクシャ族の大軍がたちこめる霧にたとえられています。霧の存在は太陽と比較になりません。ときに、太陽は霧に包まれているように見えますが、太陽そのものが覆われているわけではありません。私たちの目は雲にさえぎられることはありますが、太陽が雲に覆われることはぜったいにありません。太陽との

比較によって、いついかなるときでもドゥルヴァ・マハーラージャが偉大な人物であること確証しているのです。

第１６節

धनुर्विस्फूर्जयन्दिव्यं द्विषतां खेदमुद्वहन् ।
अस्त्रौघं व्यधमद्बाणैर्घनानीकमिवानिलः ॥ १६ ॥

ダハヌル　ヴィスプフールジャヤン　ディヴャンム
dhanur visphūrjayan divyaṁ

ドゥヴィシャターンム　ケヘーダンム　ウドゥヴァハン
dviṣatāṁ khedam udvahan

アストゥラウガハンム　ヴャダハマドゥ　バーナイル
astraughaṁ vyadhamad bāṇair

ガハナニーカンム　イヴァーニラハ
ghanānīkam ivānilaḥ

dhanuḥ—彼の弓; *visphūrjayan*—うなりをたてている; *divyam*—素晴らしい; *dviṣatām*—敵の; *khedam*—嘆き; *udvahan*—作っている; *astra-ogham*—様々な型の武器; *vyadhamat*—彼はまき散らした; *bāṇaiḥ*—彼の矢で; *ghana*—雲の; *anīkam*—軍隊; *iva*—のような; *anilaḥ*—風。

ドゥルヴァ・マハーラージャの弓がうなり、鋭い音をたてて矢が飛ぶたびに、敵兵の心は悲痛の底にしずんでいく。たたみかけるように矢を放って敵方の武器をことごとく打ち砕き、その様はあたかも烈風が雲を吹き散らすかのごとく。

第１７節

तस्य ते चापनिर्मुक्ता भित्त्वा वर्माणि रक्षसाम् ।
कायानाविविशुस्तिग्मा गिरीनशनयो यथा ॥ १७ ॥

タッシャ　テー　チャーパ・ニルムクター
tasya te cāpa-nirmuktā

ビヒットゥヴァー　ヴァルマーニ　ラクシャサーンム
bhittvā varmāṇi rakṣasām

カーヤーン　アーヴィヴィシュス　ティグマー
kāyān āviviśus tigmā

ギリーン　アシャナヨー　ヤタハー
girīn aśanayo yathā

tasya—ドゥルヴァの; *te*—その矢; *cāpa*—弓から; *nirmuktāḥ*—放たれた; *bhittvā*—貫いて; *varmāṇi*—盾; *rakṣasām*—悪魔たちの; *kāyān*—体; *āviviśuḥ*—〜に入って; *tigmāḥ*—鋭い; *girīn*—山; *aśanayaḥ*—雷; *yathā*—またに〜のように。

ドゥルヴァ・マハーラージャが放つ研ぎすまされた矢が敵兵の盾と肉体を切り裂いていく。天上の王の撃つ雷が山々を粉々に打ち砕くように。

第１８－１９節

भल्लैः सञ्छिद्यमानानां शिरोभिश्चारुकुण्डलैः ।
ऊरुभिर्हेमतालाभैर्दोर्भिर्वलयवल्गुभिः ॥ १८ ॥
हारकेयूरमुकुटैरुष्णीषैश्च महाधनैः ।
आस्तृतास्ता रणभुवो रेजुर्वीरमनोहराः ॥ १९ ॥

バハルライヒ　サンチデャマーナーナーンム
bhallaiḥ sañchidyamānānāṁ

シロービヒシュ　チャール・クンダライヒ
śirobhiś cāru-kuṇḍalaiḥ

ウールビヒル　ヘーマ・ターラーバハイル
ūrubhir hema-tālābhair

ドールビヒル　ヴァラヤ・ヴァルグビヒヒ
dorbhir valaya-valgubhiḥ

ハーラ・ケーユーラ・ムクタイル
hāra-keyūra-mukuṭair

ウシュニーシャイシュ　チャ　マハー・ダハナイヒ
uṣṇīṣaiś ca mahā-dhanaiḥ

アーストゥリタース　ター　ラナ・ブッヴォー
āstṛtās tā raṇa-bhuvo

レージュル　ヴィーラ・マノー・ハラーハ
rejur vīra-mano-harāḥ

bhallaiḥ—矢によって; *sañchidyamānānām*—寸断されたヤクシャ族の; *śirobhiḥ*—頭で; *cāru*—美しい; *kuṇḍalaiḥ*—耳飾りで; *ūrubhiḥ*—腿と共に; *hema-tālābhaiḥ*—黄金のヤシの木のように; *dorbhiḥ*—腕と共に; *valaya-valgubhiḥ*—美しい腕輪で; *hāra*—花輪で; *keyūra*—腕飾り; *mukuṭaiḥ*—そして王冠; *uṣṇīṣaiḥ*—ターバンで; *ca*—もまた; *mahā-dhanaiḥ*—非常に高価な; *āstṛtāḥ*—覆われて; *tāḥ*—それらの; *raṇa-bhuvaḥ*—戦場; *rejuḥ*—輝きだした; *vīra*—英雄たちの; *manaḥ-harāḥ*—その心を惑わせている。

偉大な聖者マイトゥレーヤがことばをつづけた。「ヴィドゥラよ。ドゥルヴァ・マハーラージャの矢で砕け散った敵兵たちの頭は、耳飾りやターバンできらびやかに飾られていた。足は黄金のヤシの木とも思われるほど美しく、腕は金の腕輪で飾られ、頭は金細工がほどこされたひじょうに高価な王冠で飾られていた。その戦場に累々と横たわるそのような飾り物は、英雄の心でさえ迷わせるほどきわめて魅力的に見えた。

要旨解説

当時、戦士が戦場におもむくときは、金の装飾品などを身につけ、頭を王冠やターバンで飾っていたことがわかります。そして戦死すれば、その装飾品は戦利品として敵方に奪われます。戦場で倒れ、装飾品に包まれた兵士たちの死骸は、戦争に加わった勇士たちにとっては、富を勝ちえる絶好の機会だったことにまちがいありません。

第２０節

हतावशिष्टा इतरे रणाजिराद्
रक्षोगणाः क्षत्रियवर्यसायकैः ।
प्रायो विवृक्णावयवा विदुद्रुवु-
र्मृगेन्द्रविक्रीडितयूथपा इव ॥ २० ॥

ハターヴァシシュター　イタレー　ラナージラードゥ
hatāvaśiṣṭā itare raṇājirād

ラクショー・ガナーハ　クシャトゥリヤ・ヴァリャ・サーヤカイヒ
rakṣo-gaṇāḥ kṣatriya-varya-sāyakaiḥ

プラーヨー　ヴィヴリクナーヴァヤヴァー　ヴィドゥドゥルヴル
prāyo vivṛkṇāvayavā vidudruvur

ムリゲーンドゥラ・ヴィクリーディタ・ユータハパー　イヴァ
mṛgendra-vikrīḍita-yūthapā iva

hata-avaśiṣṭāḥ—殺されずに生き残った兵士たち; *itare*—他の者たち; *raṇa-ajirāt*—戦場から; *rakṣaḥ-gaṇāḥ*—ヤクシャ族; *kṣatriya-varya*—もっとも偉大なクシャトリヤすなわち戦士たちの; *sāyakaiḥ*—矢によって; *prāyaḥ*—ほとんど; *vivṛkṇa*—粉々にされて; *avayavāḥ*—彼らの手足; *vidudruvuḥ*—逃げた; *mṛgendra*—ライオンによって; *vikrīḍita*—負けて; *yūthapāḥ*—象; *iva*—〜のように。

殺されずに生き残ったヤクシャたちのなかには、偉大な戦士ドゥルヴァ・マハーラージャの矢によって手や足を切断された者たちもいた。そして、ライオンとの戦いに破れた象のように、逃走した。

第２１節

अपश्यमानः स तदाततायिनं
महामृधे कञ्चन मानवोत्तमः ।
पुरीं दिदृक्षन्नपि नाविशद् द्विषां
न मायिनां वेद चिकीर्षितं जनः ॥ २१ ॥

アパッシャマーナハ　サ　タダータターイナンム
apaśyamānaḥ sa tadātatāyinaṁ

マハー・ムリデヘー　カンチャナ　マーナヴォーッタマハ
mahā-mṛdhe kañcana mānavottamaḥ

プリーンム　ディドゥリクシャン－　アピ　ナーヴィシャドゥ　ドゥヴィシャーンム
purīṁ didṛkṣann api nāviśad dviṣāṁ

ナ　マーイナーンム　ヴェーダ　チキールシタンム　ジャナハ
na māyināṁ veda cikīrṣitaṁ janaḥ

apaśyamānaḥ—見られない時に; *saḥ*—ドゥルヴァ; *tadā*—その時; *ātatāyinam*—武装した敵兵たち; *mahā-mṛdhe*—広大な戦場に; *kañcana*—だれも; *mānava-uttamaḥ*—人類のなかでもっとも優れた者; *purīm*—その都市; *didṛkṣan*—見たいと願うこと; *api*—～ではあるけれども; *na āviśat*—入らなかった; *dviṣām*—敵方の; *na*—ではない; *māyinām*—神秘家たちの; *veda*—知っている; *cikīrṣitam*—計画; *janaḥ*—だれでも。

人類のなかでもっとも優れた人物ドゥルヴァ・マハーラージャは、その広大な戦場で、まともな武器を手に立ち向かおうとする敵兵がいなくなったのを見届けた。そして、ヤクシャ族の都市アラカープリーの内部を見ようとしたが、「魔力を持つヤクシャ族がなにを考えているか、だれにもわからない」と考え、思いとどまった。

第２２節

इति ब्रुवंश्चित्ररथः स्वसारथिं
यत्तः परेषां प्रतियोगशङ्कितः ।
शुश्राव शब्दं जलधेरिवेरितं
नभस्वतो दिक्षु रजोऽन्वदृश्यत ॥ २२ ॥

イティ　ブルヴァンムシュ　チトゥラ・ラタハハ　スヴァ・サーラティンム
iti bruvaṁś citra-rathaḥ sva-sārathiṁ

ヤッタハ　パレーシャーンム　プラティヨーガ・シャンキタハ
yattaḥ pareṣāṁ pratiyoga-śaṅkitaḥ

シュシュラーヴァ　シャブダンム　ジャラデヘール　イヴェーリタンム
śuśrāva śabdaṁ jaladher iveritaṁ

ナバハスヴァトー　ディクシュ　ラジョー　ンヴァドゥリッシャタ
nabhasvato dikṣu rajo 'nvadṛśyata

iti—このように; *bruvan*—話している; *citra-rathaḥ*—ひじょうに美しい戦闘馬車を持つドゥルヴァ・マハーラージャ; *sva-sārathim*—御者に; *yattaḥ*—警戒して; *pareṣām*—敵側から; *pratiyoga*—反撃; *śaṅkitaḥ*—懸念して; *śuśrāva*—聞いた; *śabdam*—音; *jaladheḥ*—海から; *iva*—〜かのように; *īritam*—鳴り響いた; *nabhasvataḥ*—風のために; *dikṣu*—あらゆる方角に; *rajaḥ*—埃; *anu*—その時; *adṛśyata*—見られた。

魔力をそなえた敵の動向を怪しむドゥルヴァ・マハーラージャが御者と話をしていたそのとき、あたりが海に囲まれたかのように、どこからともなく凄まじい音が聞こえ、さらに、荒れ狂う埃の嵐が四方八方から襲いかかってきた。

第２３節

क्षणेनाच्छादितं व्योम घनानीकेन सर्वतः ।
विस्फुरत्तडिता दिक्षु त्रासयत्स्तनयित्नुना ॥ २३ ॥

クシャネーナーッチャーディタンム　ヴョーマ
kṣaṇenācchāditaṁ vyoma

ガハナーニーケーナ　サルヴァタハ
ghanānīkena sarvataḥ

ヴィスプフラトゥ・タディター　ディクシュ
visphurat-taḍitā dikṣu

トゥラーサヤトゥ・スタナイトゥヌナー
trāsayat-stanayitnunā

kṣaṇena—またたくまに; *ācchāditam*—覆われた; *vyoma*—空; *ghana*—分厚い雲の; *anīkena*—大量; *sarvataḥ*—どこにも; *visphurat*—まばゆい; *taḍitā*—稲光で; *dikṣu*—あらゆる方角に; *trāsayat*—脅す; *stanayitnunā*—雷鳴で。

またたくまに空が分厚い雲におおわれ、猛烈な雷鳴がどこからともなく聞こえてくる。つづいてまばゆい稲光が周囲を包み、激しい雨が降ってきた。

第２４節

ववृषू रुधिरौघासृक्पूयविण्मूत्रमेदसः ।
निपेतुर्गगनादस्य कबन्धान्यग्रतोऽनघ ॥ २४ ॥

ヴァヴリシュー　ルディラウガハースリク・
vavṛṣū rudhiraughāsṛk-

プーヤ・ヴィン・ムートゥラ・メーダサハ
pūya-viṇ-mūtra-medasaḥ

ニペートゥル　ガガナードゥ　アッシャ
nipetur gaganād asya

カバンダハーニ　アグラトー　ナガハ
kabandhāny agrato 'nagha

vavṛṣuḥ—降ってきた; *rudhira*—血の; *ogha*—洪水; *asṛk*—痰; *pūya*—膿（うみ）; *viṭ*—糞; *mūtra*—尿; *medasaḥ*—随（ずい）; *nipetuḥ*—降り始めた; *gaganāt*—空から; *asya*—ドゥルヴァの; *kabandhāni*—胴体; *agrataḥ*—〜の前に; *anagha*—おお、完全なるヴィドゥラよ。

完全なるヴィドゥラよ。その雨のなかには、血、痰、膿、糞、尿、随など、さらに人間の胴体が無数に混じり、ドゥルヴァ・マハーラージャにむかって怒濤のように落下してきた。

第２５節

ततः खेऽदृश्यत गिरिर्निपेतुः सर्वतोदिशम् ।
गदापरिघनिस्त्रिंशमुसलाः साश्मवर्षिणः ॥ २५ ॥

タタハ　ケヘー　ドゥリッシャタ　ギリル
tataḥ khe 'dṛśyata girir

ニペートゥフ　サルヴァトー・ディシャンム
nipetuḥ sarvato-diśam

ガダー・パリガハ・ニストゥリンムシャ・
gadā-parigha-nistriṁśa-

ムサラーハ　シャーシュマ・ヴァルシナハ
musalāḥ sāśma-varṣiṇaḥ

tataḥ—その後; *khe*—空に; *adṛśyata*—見ることができた; *giriḥ*—山; *nipetuḥ*—転落してきた; *sarvataḥ-diśam*—あらゆる方向から; *gadā*—戦闘棒; *parigha*—鉄の棒; *nistriṁśa*—剣; *musalāḥ*—矛; *sa-aśma*—巨大な石の塊; *varṣiṇaḥ*—〜が降りそそぎ。

つぎに、巨大な山が空に現われ、四方八方から雹（ひょう）が降りそそぎ、そのなかに無数の矛、戦闘棒、剣、鉄の棒、巨岩が混ざりあってドゥルヴァに襲いかかってきた。

第２６節

अहयोऽशनिनिःश्वासा वमन्तोऽग्निं रुषाक्षिभिः ।
अभ्यधावन् गजा मत्ताः सिंहव्याघ्राश्च यूथशः ॥ २६ ॥

アハヨー　シャニ・ニフシュヴァーサー
ahayo 'śani-niḥśvāsā

ヴァマントー　グニンム　ルシャークシビヒ
vamanto 'gniṁ ruṣākṣibhiḥ

アビャダハーヴァン　ガジャー　マッターハ
abhyadhāvan gajā mattāḥ

シンムハ・ヴャーグフラーシュ　チャ　ユータハシャハ
siṁha-vyāghrāś ca yūthaśaḥ

ahayaḥ—蛇; *aśani*—雷; *niḥśvāsāḥ*—呼吸; *vamantaḥ*—吐いている; *agnim*—火; *ruṣā-akṣibhiḥ*—怒り狂った目で; *abhyadhāvan*—現われた; *gajāḥ*—象; *mattāḥ*—狂って; *siṁha*—ライオン; *vyāghrāḥ*—虎; *ca*—もまた; *yūthaśaḥ*—群になって。

ドゥルヴァ・マハーラージャは、目に怒気をみなぎらせた巨大な蛇が群になって口から火を吹き、自分めがけて襲いかかってくるのを見た。そのあとに何頭もの狂った象、ライオン、虎がつづいてくる。

第２７節

समुद्र ऊर्मिभिर्भीमः प्लावयन् सर्वतो भुवम् ।
आससाद महाहकल्पान्त इव भीषणः ॥ २७ ॥

サムドゥラ　ウールミビヒル　ビヒーマハ
samudra ūrmibhir bhīmaḥ

プラーヴァヤン　サルヴァトー　ブフヴァンム
plāvayan sarvato bhuvam

アーササーダ　マハー・フラーダハ
āsasāda mahā-hrādaḥ

カルパーンタ　イヴァ　ビヒーシャナハ
kalpānta iva bhīṣaṇaḥ

samudraḥ—海; *ūrmibhiḥ*—波と共に; *bhīmaḥ*—激しい; *plāvayan*—押し寄せている; *sarvataḥ*—あらゆる方向に; *bhuvam*—地球; *āsasāda*—襲ってくる; *mahā-hrādaḥ*—大きな音をたてている; *kalpa-ante*—〜カルパの終わりの（消滅）; *iva*—〜のような; *bhīṣaṇaḥ*—恐ろしい。

さらに、あたかも全世界が消滅する時が来たかのように、泡立つ波とともに荒れ狂う恐ろしい海が巨大なうなり声とともにドゥルヴァめがけて打ち寄せてくる。

第２８節

एवंविधान्यनेकानि त्रासनान्यमनस्विनाम् ।
ससृजुस्तिग्मगतय आसुर्या माययासुराः ॥ २८ ॥

エーヴァンム・ヴィダハーニ　アネーカーニ
evaṁ-vidhāny anekāni

トゥラーサナーニ　アマナスヴィナーンム
trāsanāny amanasvinām

サスリジュス　ティグマ・ガタヤ
sasṛjus tigma-gataya

アースリャー　マーヤヤースラーハ
āsuryā māyayāsurāḥ

evam-vidhāni—このような（現象）; *anekāni*—数多くの〜; *trāsanāni*—恐ろしい; *amanasvinām*—知性の足らない人々に対して; *sasṛjuḥ*—彼らは創りだした; *tigma-gatayaḥ*—極悪な気質の; *āsuryā*—悪魔的な; *māyayā*—幻想によって; *asurāḥ*—悪魔たち。

悪魔のヤクシャ族は、生まれながらにして邪悪な気質を持ち、悪魔的な幻術を使って、知性に欠ける者を恐怖に陥れる摩訶不思議な幻影を限りなく引きおこすことができる。

第２９節

ध्रुवे प्रयुक्तामसुरैस्तां मायामतिदुस्तराम् ।
निशम्य तस्य मुनयः शमाशंसन् समागताः ॥ २९ ॥

ドゥルヴェー　プラユクターンム　アスライス
dhruve prayuktām asurais

ターンム　マーヤーンム　アティドゥスタラーンム
tāṁ māyām atidustarām

ニシャミャ　タッシャ　ムナヤハ
niśamya tasya munayaḥ

シャンム　アーシャンムサン　サマーガターハ
śam āśaṁsan samāgatāḥ

dhruve—ドゥルヴァに対して; *prayuktām*—加えられた; *asuraiḥ*—悪魔たちによって; *tām*—その; *māyām*—神秘的な力; *ati-dustarām*—非常に危険な; *niśamya*—聞いた後; *tasya*—彼の; *munayaḥ*—偉大な聖者たち; *śam*—幸運; *āśaṁsan*—〜に対して激励する; *samāgatāḥ*—集まった。

ドゥルヴァ・マハーラージャが悪魔たちの妖術に撹乱されていることを聞いた偉大な聖者たちはすぐに集まり、勝利を約束する激励のことばを伝えた。

第３０節

मुनय ऊचु
औत्तानपाद भगवांस्तव शार्ङ्गधन्वा
देवः क्षिणोत्ववनतार्तिहरो विपक्षान् ।
यन्नामधेयमभिधाय निशम्य चाद्धा
लोकोऽञ्जसा तरति दुस्तरमङ्ग मृत्युम् ॥ ३० ॥

ムナヤ　ウーチュフ
munaya ūcuḥ

アウッターナパーダ　バハガヴァーンムス　タヴァ　シャールンガダハンヴァー
auttānapāda bhagavāṁs tava śārṅgadhanvā

デーヴァハ　クシノートゥヴ　アヴァナタールティ・ハロー　ヴィパクシャーン
devaḥ kṣiṇotv avanatārti-haro vipakṣān

ヤン・ナーマデヘーヤンム　アビヒダハーヤ　ニシャミャ　チャーッダハー
yan-nāmadheyam abhidhāya niśamya cāddhā

ローコー　ンジャサー　タラティ　ドゥスタランム　アンガ　ムリテュンム
loko 'ñjasā tarati dustaram aṅga mṛtyum

munayaḥ ūcuḥ—聖者たちが言った; *auttānapāda*—ウッターナパーダ王の子息よ; *bhagavān*—至高人格主神; *tava*—あなたの; *śārṅga-dhanvā*—シャールンガという名の弓を持つ方; *devaḥ*—主; *kṣiṇotu*—主が殺すように; *avanata*—身を委ねた魂の; *ārti*—苦しむ者; *haraḥ*—取りのぞく者; *vipakṣān*—敵; *yat*—〜である者の; *nāmadheyam*—聖なる名前; *abhidhāya*—唱えること; *niśamya*—聞くこと; *ca*—もまた; *addhā*—すぐに; *lokaḥ*—人々; *añjasā*—完全に; *tarati*—克服する; *dustaram*—乗り越えられない; *aṅga*—ドゥルヴァよ; *mṛtyum*—死。

聖者たちが言う。「ドゥルヴァよ、ウッターナパーダ王の子息よ。献愛者を苦しみから救うシャールンガダンヴァーという名をもつ至高人格主神が、あなたを攻撃している

敵をことごとく殺害してくださるよう祈る。主の聖なる名前は主と同じ力をそなえており、多くの人々が、恐ろしい死をたやすく克服する。こうして献愛者は救われるのである」

要旨解説

偉大なリシたちは、ヤクシャ族が仕かけた妖術に困惑しきっていたドゥルヴァ・マハーラージャに語りかけました。献愛者はいつでも至高人格主神に守られます。聖者たちは、主の導きを受けたからこそドゥルヴァ・マハーラージャの元に駆けつけ、「あなたは至高主に完全に身をゆだねた魂だから、危険などはない」と励ましたのでした。献愛者は、死ぬときに主の恩寵をさずかってただ主の聖なるマハー・マントラ――ハレー・クリシュナ、ハレー・クリシュナ、クリシュナ・クリシュナ、ハレー・ハレー、ハレー・ラーマ、ハレー・ラーマ、ラーマ・ラーマ、ハレー・ハレー――を唱えさえすれば、物質界という広大な海を乗りこえて精神界に入ることができます。そうすれば、生と死が繰りかえされる世界には決してもどりません。ただ主の聖なる名前を唱えるだけで、私たちは死の海を渡りきることができます。だからこそ、そのときはヤクシャ族の妖術に心乱されはしたものの、やがてドゥルヴァ・マハーラージャが勝利をおさめることは、確実だったのです。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第4編・第10章、「ドゥルヴァ・マハーラージャとヤクシャ族の戦い」の要旨解説を終了します。